

事例5

福井クラスター
若狭高校生徒の興味・関心を尊重した
3年間の探究学習から
全校的な教育改革をめざす

普通科、文理探究科、海洋科学科の3学科を設置する福井県立若狭高校は、2016年度より、3か年を通じた全学的な探究活動に取り組んでいる。文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）」の成果を発展させながら、総合的な学習の時間の中で、人文科学系統のテーマも含んだ幅広い視野で、生徒の課題設定能力を伸ばす教育活動を進めている。

OECD日本イノベーション教育ネットワーク 福井クラスター プロフィール

“Think Green”と“Skills Demand and Supply”の2つをテーマに掲げ、福井県立若狭高校、福井県立羽水高校、福井県立敦賀高校が海外学校と課題研究や交流事業に取り組む。若狭高校はシンガポールのテマセク・ジュニア・カレッジ（TEMASEK JC）と“Think Green”をテーマとし、スカイプや直接交流を通じて互いの学習成果を共有しながら、PBL（課題解決型学習）を共同で実施し、2030年の社会において必要となる資質・能力等を培っていく。▶▶▶若狭高校ウェブサイト：<http://www.wakasa-h.ed.jp/>

3年間を通じた生徒主体の探究学習に
学校全体で取り組む

若狭高校では、すべての生徒が高校3年間で、地域資源を主な題材に、自分の興味・関心に応じてテーマ設定をしながら、じっくりと探究学習に取り組める教育プログラムを展開している。

これまでも同校では、普通科、文理探究科（2年生以降は国際探究科・理数探究科に分かれる）、海洋科学科の全学科で探究学習を進めてきたが、普通科の生徒は1年次みの取り組みであった。また、1年次の最初の半年は全員共通のテーマで論文作成などに取り組み、生徒の自由な

テーマ設定での探究学習は1年次後半からのスタートとなっていたため、1年次での活動はどうしても慌ただしくなってしまうという課題があった。そこで2016年度の1年生からは、最初から生徒が地域資源を主な題材として探究学習のテーマを設定できるようにして、1年間かけて学習していけるようにした。

「特に大切にしたのは、生徒が自分で問いをつくること。そして、問いをつくることを面白いと生徒が感じる」と同校の新しい探究学習を渡邊久暢先生は説明する。

「面白さとは、自分にとってよく分からないことを探究するところにあります。誰も取り組んだことがないテーマに面白さを見いだす人もいますが、既存のテーマでもそこに自分の分からないことを見つけ、追究していくことで面白くなります。目新しさよりも、生徒が「これを考えてみたい」と納得し、主体的に取り組めることを重視し



1年生のクラスでは、それぞれのグループから探究学習の進捗報告が行われた。他者に発表することで探究の価値や今後の活動を整理するねらいがある。また、他者に伝える発表のしかたについて体験的に考える機会にもなっている。



ています」

多様な出会いの場をつくり
生徒の興味・関心を育む

とはいえ、高校生にとっては、自分で課題を見つけるのは容易ではない。実際、同校もこれまでの探究学習で試行錯誤を繰り返してきたという。

「かつて本校で探究学習を始めたばかりのころは、教師から『こういうテーマはどうだ?』と投げかけ、そこから生徒に考えさせていました。しかし、それでは生徒は面白くないと気がつき、「自由にやってみなさい」と声をかけるようにしましたが、それだけではなかなかテーマが出てきません。そこで、身近な地域のことから始めてみようとして、ラムサール条約に指定された地元の湖に出かけてみたところ、その湖に関するテーマばかりになってしまったこともありました」

そこで16年度の1年生は、生徒が本来内面に秘めている興味・関心を、地域にかかわるさまざまな人との出会いの中で引き出し、結びつけながら、自分のテーマに迫れるように配慮した。1年生では同じようなテーマを選んだクラスメートと緩やかにグループを形成するが、生徒が自分の興味を徐々に絞り込めるように、学外からさまざまな社会人を招き、生徒が興味を持った人から話を聞く機会を5月、9月、1月に作った。

「5月は、生徒が自分の将来を考えるヒントになるような話を社会人に話していただきました。地元の医師、介護施設の職員、さらに京都のデザイナーなど15人ほどを講師として招きました。9月と1月は、小浜市、若狭町、高浜町、おおい町の4市町から、農林水産課、観光商工課などさまざまな部署の方を20数名講師として招きました。いずれも、



校内の至るところに、1年生に向けて「探究学習の進め方」を先輩生徒の取り組みを紹介するボードが設置されている。SSHの活動で培った経験は、生徒の間で確実に受け継がれている



福井県立若狭高校
渡邊久暢
わたなべ・ひさのぶ

生徒は自分の興味がある講演を自由に選びましたが、学外の人の多様な経験や考え、専門家による深い知識に触れることで、大いに刺激を受けたようです」

教師はすべての専門家ではなく
生徒と共に学ぶ存在

夏休みには、生徒たちは自身が関心を持つ地域の課題について調べ、各自1枚、ポスターをつくって発表した。

「これまでの1年生の探究学習では、論文作成の比重が大きかったのですが、ただ文を書くだけでなく、内容を端的に伝えるキャッチコピーを考え、さらに自分で撮った写真なども資料にしながらポスターを作らせることにしました。考えてみれば実社会でも、テキストだけで説明するプレゼンテーションは今では少ないですね」

また、生徒一人ひとりが地域に関するキーワードを挙げ、そこからイメージする事象を書き出し、つなげていくウェビングの手法を用い、生徒にそれぞれの知識と経験をアウトプットさせながら、何に興味があるかを考えさせた。さまざまな活動の中で生徒の中に生まれつつある「問い」の萌芽を、生徒に自分の思考を整理させることで、具体的な問いへと育てようとしたのだ。

こうした過程の中で、「このテーマが面白そうだ」という興味・関心が徐々に生徒の中に生まれてきた。そして、各クラスで、例えば地域の特産物について考えたい生徒、町の人口をいかに増やすかを考えたい生徒といったように、ゆるやかにテーマがカテゴライズできるようになった。

「生徒に自由に考えさせた結果、カテゴライズされたテーマの内容、数はクラスごとに違う結果となりました。担任・副担任が全く考えたことがないようなテーマ、どのようにサポートすれば良いかわからないテーマもあります。しかしそれでも構わないと思うのです。私たちがわからなければ、行政や研究機関に生徒をつなげばいいのですから。例えば、野生鳥獣の農作物被害とその対策を考えるグループでは、駆除した鹿や猪の肉をどうするかという問題に直面しました。当然、学校の中だけで考えても限界がありますから、地域の解体処理施設の職員に教えていただきました。



トランプを使った確率に関する課題研究に取り組む生徒。ここでは教師も、同じ課題に向き合う仲間だ。



ラン藻類のイシクラゲを肥料として利用する実験を行うグループ。公園やグラウンドに生える身近な植物を有効活用しようという挑戦だ。



地域の農作物の鳥獣被害を調査しているグループ。実際に町を歩き、地域の人たちとコミュニケーションしながら、解決すべき課題に迫っていく。



海中に浮遊する微小なプラスチック粒子（マイクロプラスチック）について調査する。この研究は今後、OECD日本イノベーション教育ネットワークのプログラムとして、シンガポールやアメリカの学校との共同で展開される予定だ。

我々教師はすべてのテーマの専門家ではありませんから、我々も生徒と一緒に広く社会について学んでいく態度が必要です。地域の人たちをはじめ、広く外部の力を借りながら進めています」

高い指導力を持つ教師だからこそ かわり方を変えることができる

生徒が自分の興味・関心を軸に、考えたいテーマ、解決に貢献したい社会課題を見つけ、取り組んでいく同校の探究学習。だが、このような生徒を主体とする学習活動は、日本の高校教育の中ではまだまだ多くの学校で行われているとは言えない。そのため、担当する教師も、どんなタイミングに、どの程度教師が引っ張るのか、悩みながら指導に当たることになる。

「これまでの指導観のように自分が動かすのではなく、

生徒に学びを任せるとするのは、多くの教師にとってまだまだストレスです。それは、教師がある程度は学びをコントロールすることで、生徒に学びのプロセスや成果を実感しやすくしてあげたいという思いがあるからです。これは、高い指導力を備えた日本の教師ならではの思いであり、そして長所でもありました。探究学習では、そこから一歩進んで、生徒の学びへのかかわり方を変えることが求められています。指導力のある教師ほど、実はその変化が起こりやすいと感じています」

特に、学習が停滞しているように見えるグループに対して、私たち教師はつい手をさしのべたくなると渡邊先生は笑う。だが、教師がその衝動を抑え、生徒を見守ることで生徒自身の力で壁を突破することができれば、学びはより大きな価値を生むことも教師は知っている。

「教師の介入が過ぎると、それは教師の探究学習になってしまう。教師のかかわりのさじ加減は、マニュアル

化できるものではありませんから、私たちが試行錯誤しています」

地域と結びつきながら、 教育活動全体をさらに改善していく

生徒が主体的に学び、そして教師も生徒と学ぶ探究学習を実現するためには、教師の探究学習に対するスタンスが問われる。同校で重要な位置を占めているのが、週1回の教師ミーティングだ。

「本校の探究学習は、1年生の担任、副担任がチーム・ティーチングで担当していますが、メイン担当は副担任が務めています。これは担任の負担を軽減するため、さらに副担任が普段のクラス経営に積極的に関わることとすることです。そして、各クラスの副担任は、学年主任を交えて週1回ミーティングを行い、各クラスの進捗と次週の授業設計について話し合っています」

このミーティングで繰り返し共有されているポイントは、「探究学習の最終的な成果はアウトプット物ではない」ということだ。

「3年間の探究学習の中でも、特に1年生においては、笑顔で、楽しくのめり込むことが重要だということは、ミーティングの中で繰り返し確認し、共有が図られています」

生徒の探究学習を見守る中で、教師にも少しずつ変化が生まれているという。

シンガポールTEMASEK JC との課題解決型学習

若狭高校の探究学習は、生徒の身近な興味・関心、そして地域の課題を土台としている。グローバル社会に必要な資質・能力を育むことを狙って、シンガポールやアメリカの学校と交流しながら学習が進められている。

若狭高校は、OECD日本イノベーション教育ネットワークのプログラムに参加し、シンガポールのテマセク・ジュニア・カレッジと協働探究学習に取り組んでいる。これまで、スカイプを利用して、お互いが取り組む課題解決型学習を紹介し、コメントし合うなどの活動を行ってきた。今後は、沿岸部のマイクロプラスチック汚染について共同研究に取

り組む予定だ。

「シンガポールの生徒との交流の中で、何のために研究するのか、どんな研究を面白いと思うかなど、本校の生徒はさまざまギャップを感じるでしょう。価値観の違いを感じながら、それでも一緒に取り組むことの難しさを体感することは、グローバル社会を生きる生徒にとって、かけがえない経験になるはずだ」（渡邊先生）

テマセク・ジュニア・カレッジとの交流の中で、若狭高校の教師も、探究学習のプログラム構成やアウトプット方法などで、価値観や方法論の違いに直面し、刺激を受けている。今後は、アメリカのアニモリーダーシップハイスクール等とも協働探究授業を行うことが決まっているが、こうした活動は教師にとって専門性開発の機会となっている。



社会研究の探究成果を英語でプレゼンテーションする若狭高校の生徒。